



けんこう 処方箋

北海道対がん協会長 加藤 元嗣



ピロリ菌研究 日本が先駆け

前回は、ピロリ菌が胃に感染すると慢性胃炎となつて、さらに胃や十二指腸潰瘍、そして胃がんの原因になることを説明し、それらを予防するのに「ピロリ除菌」が大切なことをお話ししました。

2005年のノーベル生理学賞は、ピロリ菌を発見した豪州の病理学者ロビン・ウォーレン先生と内科医バリー・マーシャル先生に授与されました。「ピロリ菌と胃炎・胃潰瘍・十二指腸潰瘍との関連の解明」が受賞理由で、この時点では、ピロリ菌と胃がんとの関わりはまだ明らかになっていませんでした。

ピロリ菌の発見前、胃・十二指腸潰瘍の治療は、胃酸の分泌を抑える薬を使っていました。酸などの「攻撃因子」と、粘膜を守る「防御因子」のバランスが崩れるため、潰瘍を発症すると考えられていたからです。しかし投薬で治癒しても薬をやめるとすぐ再発し、予防のために薬を続けても完全に再発を防ぐことは困難でした。胃・十二指腸潰瘍になると、生涯にわたり再燃と寛解を繰り返すと思われていました。

ところが原因がピロリ菌と判明してから除菌治療で再発を起こすことがなくなりました。胃・十二指腸潰瘍は、解熱鎮痛薬などが原因とい

は1990年代前半から研究が始まり、感染している人と、していない人を長期経過で比べ、胃がんの発症は感染者で多く見られるとの論文が相次いで発表されました。世界保健機関（WHO）の専門組織である国際がん研究機関（IARC）も94年、「胃がんの明確な原因はピロリ菌」と発表しています。

ピロリ菌をめぐる日本発の論文が世界に先駆けて報告されていま

す。90年代後半には動物実験でピロリ感染による胃がんの発症が確認され、除菌で胃がん予防できることも判明しました。2000年になると、それらを裏付ける報告が続きます。感染者と未感染者に内視鏡検査をして、約10年間追跡すると、感染者からは胃がんが一定の割合で毎年発見され、未感染者からは全く認められなかったというのが最初の重要な報告です。

イラスト・佐藤博美

う場合もあるので、今ではピロリ菌の陽性を確かめた上で除菌治療が行われます。日本では2000年に胃・十二指腸潰瘍に対するピロリ除菌が保険適用となりました。感染者の減少とピロリ除菌で再発がなくなったため、厚生労働省の統計開始から20年までの36年間で推定患者数は、胃潰瘍で5分の1に、十二指腸潰瘍では20分の1に激減しています。

一方、胃がんとピロリ菌の関わり